

《活用事例》

高等学校国語科「言語文化」の授業実践 — 『愛知県史 資料編6 古代編1』を用いた言語活動

加藤 好広

はじめに

高等学校学習指導要領（平成30年告示）において、国語科の目標の一つとして「言葉のもつ価値への認識を深めるとともに、言語感覚を磨き、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う」ことを挙げている（文部科学省2018:21）。「我が国の言語文化の担い手としての自覚をも」つとは、「我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの、つまり、文化としての言語、また、それらを実際の生活で使用するによって形成されてきた文化的な言語生活」の「担い手としての自覚をもつ」ことである（文部科学省2018:24）。この目標を受けた科目の一つとして共通必修科目「言語文化」（以下「言語文化」）がある。「言語文化」の目標の一つとして「言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を持ち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う」ことを挙げ、「文化としての言語、文化的な言語生活、多様な言語芸術等に重点を置き」、それらを「自らが継承、発展させていく担い手としての自覚をもつことを目指している」（文部科学省2018:111）。つまり、上代から現代まで脈々と続く言語・言語文化を受け継いでいることを学習者自身が意識し、それらを継承・発展させる主体となることを目標としているのである。

本稿の目的は高等学校学習指導要領の掲げる国語科の目標を達成し、学習者の資質・能力を育成するための授業設計を提示することである。具体的には「言語文化」の教科書に多く掲載される『伊勢物語』に焦点を当て、学習者の資質・能力を育成するためのパフォーマンス課題及びルーブリックについて論を進めて行きたい。

1 教材としての『伊勢物語』の先行研究

最初に教材として『伊勢物語』を扱った先行研究を確認したい。「歌物語」での和歌が、内容や主題を展開させることに着目した西（2006）は「個々の和歌が表現している主人公の心情や物語の展開が『旅の心』とどのように関連しているか」を学習者が考える授業展開を示している（西2006:134）。那須（2015）は「東下り」に含まれている「四首の歌は、それぞれが『旅の心』を示したもの」（那須2015:65）と、西（2006）同様に和歌と「旅の心」に着目している。「和歌の詠まれた場所と、歌の内容や技法の多寡」と男の心情の変化に着目した徳植（2022）は「『男』が和歌に詠んだ場所をそれに関連付けて読み取らせることで、それぞれの和歌にこめられた心情は、より実感を伴って、深く感じ取ることができる」とし、「旅を進めて行くにしたがって、一行の心理・心情」の変化に着目することを提案している（徳植2022:27）。また、教科書に掲載された挿絵（物語絵）を読解指導に用いた授業実践を行った窪田（2016）は「挿絵を契機に本文読解を行うこ

とによって学習者は古典を多義的に読むことのできる可能性に気付いたり、「自らが納得のいく読みを主体的に導き出すことができ」たりすると述べている（窪田2016:28）。授業展開に書く活動を組み込んだ実践として、山岡（2015）、畠山（2020）がある。登場人物の立場になって書き、その後、他の学習者と各自の読み方を報告し合う授業実践を行った山岡（2015）は「登場人物の立場に立ったり、別の視点で眺めたりして読みを深めていく」ことや「時代背景が異なり、分からないことも多い古典だからこそ、学習者は想像力をかきたてられ」と報告している。教科書の脚注や注釈書によって解釈・口語訳が分かる『伊勢物語』第9段の一場面の授業実践を行った畠山（2020）は「自分がその場に居合わせたらどうなるか」と「場面を想像して読む」ことを報告している（畠山2020:41）。古典の享受・継承を担うための学習について有馬（2018）は、教科書中の文言や挿絵、写真などの「古典の享受・継承への着目を明確に促す教材を含む教科書」を「活用すること」で「古典の発展的な享受・継承に関する学習が可能」になると述べている（有馬2018:57）。

先行研究を整理すると、個々の和歌と主人公の心情を関連させたり（西2006）（那須2015）（徳植2022）、挿絵を用いて多義的に読むこと（窪田2016）や場面を想像して読んだりする（山岡2015）（畠山2020）ように、『伊勢物語』本文の読み（解釈）を中心とするものが多い。たしかに、読むことを中心とした指導を行うことで、学習者に主体的な本文の読み（解釈）を促すことができる。しかし、本文の読み（解釈）を行うだけでは、言語や言語文化を継承することはできても、発展もしくは活用しているとは言い難い。また、有馬（2018）の考えに即して教科書に掲載されている挿絵や写真などを用いる授業実践を行うことで、作品の内容理解と併せて作品の享受・継承の仕方を学習者に考えることを促す

ことができるだろう。しかし、挿絵や工芸品などの写真などを用いて作品の享受・継承の流れを学習することが、学習者自身が言語や言語文化を「発展させていく担い手」（文部科学省2018:111）となることを促しているとは言い難い。

以上のことを踏まえて、本論文では、以下の2点を踏まえた授業実践について報告する。

- 1 作品の内容理解だけでなく、どのようにすれば学習者が作品を活用することができるのか。
- 2 古典の学習を踏まえて、学習者が言語や言語文化を発展させる主体となるための手立てはどのようなものか。

2 言語文化の継承・発展としての「歌枕」

2.1 「歌枕」について

上代から現代まで脈々と続く言語・言語文化の一つに「歌枕」がある。「歌枕」は「しばしば和歌に詠み込まれた諸国の名所」で「時代が下るにしたがって歌の中で詠まれる名所についてだけを指すようになっていく」ものである（愛知県史編さん委員会編2016:511）。また、「歌枕は、情緒の固定化と典拠の尊重と結びついており、その地名を挙げるだけで、一定の景物が連想され」たり、「その地名そのものが発する情緒を、歌人が自ら解釈し、これを歌に詠むことで、その地名は新たな文学的価値を付され、結果として地域の風土を作り出し」たりする（愛知県史編さん委員会編2016:512）。『伊勢物語』（東下り）において「八橋」の地で「『かきつばた』の五文字を句の上に置いた和歌を詠み、聞く人はみな涙を流した」場面に京都の貴族たちは「心を打たれ、八橋の風景は多くの人に共有され」た（愛知県史編さん委員会編2018:471-472）。また、後の時代に『伊勢物語』が継承された例として『更級日記』や『平治物語』、『東関紀行』がある（愛知県史編さん委

員会編:2018:471)。

2.2 「歌枕」の位置づけ

ここで「歌枕」の現在での位置づけについて、2つの先行研究を用いて確認したい。コンテンツ・ツーリズムを地域の再生や活性化とむすびつける増淵(2010)は「日本では古くは歌枕、そして『東海道中膝栗毛』や『太平記』などが読み物として定着した江戸時代から(コンテンツ・ツーリズム:引用者注)同様の観光はあった。物語の追体験がその類の観光では支柱になっていく」と述べる(増淵2010:14)。また、俳諧を起点に名古屋の歌枕「星崎」に着目した加藤(2023)は「星崎ではこの土地を訪れた松尾芭蕉によって『星崎の闇を見よとやなく千鳥』(笈の小文)を発句とした歌仙があまれ、これを記念して芭蕉存命中に千鳥塚が築かれ」たことから、「名古屋の歌枕は江戸時代に入ると、他の地域と同様に俳諧の世界でも詠まれるようになり、その作品とともに名所として世間に知られていく」と述べている。そして、「重厚なイメージが喚起できる歌枕は、名古屋の貴重な文化資源の一つであり、観光資源としての可能性を秘めている」と指摘している(加藤2023:13-14)。増淵(2010)、加藤(2023)の両者は、「歌枕」を物語の追体験をするための媒介としたり、和歌・俳諧のイメージを喚起させたりする観光資源として捉えている。これは上代から現代まで脈々と続く言語・言語文化の一つとして挙げられる「歌枕」を継承し、発展させる事例と言える。

3 授業概要

上代から現代まで脈々と続く言語・言語文化の一つとして挙げられる「歌枕」を学習者が活用し、言語や言語文化を発展させる主体となる授業設計について述べる。

3.1 授業のねらい

本授業では教材文(伊勢物語・東下り)の和歌及び前提となる本文内容を踏まえて、歌枕「八橋」のPR文を書くことを目的としている。ねらいを和歌や本文内容をもとにして学習者が新たな意味生成を行い、歌枕を発展させることと設定した。

3.2 授業について

3.2.1 授業構成

本単元は「言語文化」の7時間の授業構成で実施した。以下に授業構成を示す。

時間	活動内容
1～3時間目	教材文(『伊勢物語』(東下り))の読み取り。
4時間目	課題①『「からころも」』の和歌の一節を取り上げて、和歌に詠まれた内容を説明し、その説明を踏まえて知立市(八橋)を訪れる観光客向けのPR文を書こう!』の作文の下書きを書く。
5時間目	下書き①をもとにカンファレンスを行い、その後、作文の清書を書く。
6時間目	課題②「歌枕『八橋』にちなんだ3首の和歌から和歌の一部を取り上げて、和歌に詠まれた内容を説明し、その説明を踏まえて知立市(八橋)を訪れる観光客向けのPR文を書こう!』の作文の下書きを書く。
7時間目	下書き②をもとにカンファレンスを行い、その後、作文の清書を書く。

3.2.2 使用教材

1～3時間目及び4・5時間目で使用した教材は『伊勢物語』(東下り)である。6・7時間目では歌枕が景物を連想させたり、地域の風土を生成したりすることを伝えたうえで、歌枕を国別に分類し、該当する和歌を載せる「歌枕名寄」を『愛知県史資料編6 古代1』を用いて紹介し、その中に「八橋」の項目があることを学習者に提示した。『愛知県史資料編6 古代1』に掲載されている「『歌枕名寄』○高松宮家蔵」の八橋の項目には8首の和歌がある。その中から勅撰和歌集に入集したり、『古今和歌六帖』に採られたりしている和歌に絞り、以

下の3首の和歌を授業に用いた。また、取り上げた3首の和歌に対してそれぞれ口語訳を付け、以下の通りに提示した。

うちわたし長き心は八橋の蜘蛛手に思事は絶えせじ

【口語訳】ずっとあなたをあきらめずに思っている私の気長な心は、ただ気長なだけではなく、八橋の蜘蛛手のように、あれこれとすることが絶えないでしょう(完全に切れてしまうことがないだろう)。

恋せじとなれるみかはの八橋のくもでに物を思ふころかな

【口語訳】もう苦しい恋はすまいと決めたはずのわが身ではあるが、あの三河の八橋のように、蜘蛛手のようにあれこれと方々に思いが乱れるこの頃であることだ。

もろともにゆかぬみかはの八橋を恋しとのみやおもひわたらむ

【口語訳】あなたといっしょに行かない身だがあの三河の国。しかしながらそこにある八橋を渡るように、あれこれとあなたのことだけをはるかに思い続けよう。

3.2.3 学習者への言語活動についての説明

最初に4時間目の活動(和歌の一節を取り上げて、和歌に詠まれた内容を説明し、その説明を踏まえて知立市(八橋)を訪れる観光客向けのPR文を書く活動)について、学習者への説明、言い換えれば、和歌の着目点とPR文作成のポイントについて述べたい。また、実際に使用したパワーポイントを併せて示す。

最初に言語活動の進め方として、次①～③の手順で行うように説明をした。それぞれの手順において学習者の考えや活動を促したい点を、パワーポイン

トを使って説明した。

進め方①「上記の和歌(『からころも』の和歌)の中から、あなたが着目したい一節(箇所)を抜き出す。」

1～3時間目の教材文の読み取りにおいて行った「からころも」の和歌の口語訳を参考にして、和歌の中で最も重要な箇所(句)を抜き出し、重要だとする理由を考えるように説明した。和歌の中から一か所(一句)を抜き出す理由は、和歌の勘所を学習者自身が捉え、自ら説明することを促すためである。言い換えれば、「一首に嵌め込まれていた時には見えなかった、一句の潜在的な可能性」(渡部1999:151)を見出す行為を学習者自身が体験することを促すためである。



伊勢物語(東下り)	
和歌の一節を取り上げて、和歌に詠まれた内容を説明し、その説明を踏まえて、知立市(八橋)を訪れる観光客向けのPR文を書こう!	
・進め方① 唐衣 きつつなれにし つましあれば はるばるきぬる 旅をしぞ思ふ 上記の和歌の中から、あなたが着目したい一節(箇所)を抜き出す。 ☞5/7/5/7/7の中から一か所(一節)を選ぶ。 ☞着目した理由、和歌の中でポイントだと考える理由を考える(書く)。	
 抜き出した箇所からどんなことを考えますか?	 どんなところが和歌の中で重要だと考えますか?

図1

進め方②「和歌の解釈の説明をする。」

和歌の口語訳だけでなく、和歌が詠まれた状況や背景を①で着目した語句を踏まえて、わかりやすく説明するようにした。これは「テキストが述べているのは具体的にはどのような状況であるかを想像」する(村田2001:193)ように促すことを目的としている。

進め方③『『からころも』の和歌の口語訳の説明をもとにしてPR文を書く。』

ここでは、和歌のポイント及び説明をもとにして、歌枕「八橋」を使った観光客向けのPR文を書くようにした。言い換えれば、学習者自身に「テキストをきっかけにして新しい意味の生成に向かって自分

の知識を動員」する（村田2001:194）ことを促し、学習者自身が「歌枕」を継承し、発展させる主体となることを目的としている。学習者には具体的な観光客（年齢層や人数など）と訪れた人に何を勧めるかの2点を考えることを伝えた。これは「誰に」「何をしてほしいか」という、対象と目的を明確にすることを目的としたためである。

『伊勢物語』（東下り）パフォーマンス課題②

①歌枕「八橋」にちなんだ和歌（三首の中から）一つ選ぶ。
 ・うちわたし 長き心は 八橋(やつはし)の 蜘蛛手に思(おもふ) 事は絶(た)えせじ
 ・恋せじと なれるみかはの 八橋の くもてに物を 思ふころかな
 ・もろどもに ゆかぬみかはの 八橋を 恋しとのみや おもひわたらむ

②選んだ和歌の解釈の説明をする（長くならず、短く説明する）。
 ※口語訳を参考にして「こんなこと想いを述べてますよ」と、選んだ和歌を知らない人、口語訳を読んでない人にわかりやすく伝える工夫をしよう！

③あなたが着目した和歌の一部を抜き出し、着目した理由を書く。
 ※今回は5・7・5・7・7ではなく、和歌の一部を抜き出そう！（例：「唐衣」の和歌の場合、「はるばるさめる旅」など）
 ※和歌の口語訳を参考にして、どのようにいいのか？何がポイントか？を書こう。

図2

次に6時間目の活動について述べたい。進め方は4時間目の活動をもとにして、次の①～④の手順で行った。

- ①歌枕「八橋」にちなんだ和歌（三首の中から）一つ選ぶ。
- ②選んだ和歌の解釈を説明する（長くならず、短く説明する）。
- ③あなたが着目した和歌の一部を抜き出し、着目した理由を書く。

伊勢物語（東下り）

和歌の一節を取り上げて、和歌に詠まれた内容を説明し、その説明を踏まえて、知立市（八橋）を訪れる観光客向けのPR文を書こう！

・進め方③「からころも」の和歌の解釈の説明をもとにしてPR文を書く。

※具体的な観光客を考えよう！
 どんな人に訪れてほしいの？
 年齢層は？（若い人？年配の人？）
 個人旅行？複数人の旅行？家族旅行？

※訪れた人に何を勧めるかを考えよう！
 訪れた人に何をしてほしいの？
 訪れた人に何を考えてほしいの？
 観光客（八橋を訪れた人）に
 具体的に何を勧めるの？

「からころも」の和歌の
 内容・ポイントと関連させよう！

図3

- ④選んだ和歌の解釈の説明をもとにしてPR文を書く（和歌の内容を含めて書く）。
- なお、①～④の内容は4時間目と同じだが、初見

の和歌3首を題材とするため、②「選んだ和歌の解釈を説明する」を先に行った。

3.2.4 ルーブリック

パフォーマンス課題を評価する基準としてルーブリックを作成した。評価の基準は「解釈・理由の示し方」と「文章の一貫性」の2つを設け、評価は3段階（A-C）とした。学習者に示したルーブリックは以下の図4の通りである。

	A	B	C
解釈・理由の示し方	和歌のポイントとした理由の説明が、抜き出した箇所だけでなく、和歌や詠まれた背景などにまで及んでいる。	・和歌のポイント（着目理由）を具体的に説明している。 ・和歌の解釈（説明）を正しく書いている。	・和歌のポイント（着目理由）が和歌の口語訳と同じである。 ・和歌の解釈や説明を正しく書いていない。
文章の一貫性	PR文の内容が詳しく、物語や和歌の内容を反映している（もしくは、物語や和歌の内容を応用している）。	・和歌のポイントとPR文（八橋でのお勧めの行動など）の内容が一貫している。 ・訪れる対象とPR文の内容が具体的に書かれている。	・和歌のポイントとPR文の内容が一貫していない。 ・訪れる対象とPR文の内容などを単語で書いている。

図4

3.2.5 学習者のパフォーマンス作品

学習者に次のような文例を示し、PR文を書く際の負担（認知的負荷）が軽減するようにした。以下に示すのは4・5時間目の課題①の文例である。

「八橋」は歌枕の地として多くの和歌に詠まれてきました。その「八橋」で詠まれた和歌として、『伊勢物語』（東下り）の「からころも」の和歌があります。

「からころも」の和歌は、○○○ということ詠んだ和歌である。

この和歌の中の「▽▽▽」という箇所が×××であることがポイントである。

◎◎◎をしたい方は歌枕「八橋」を訪れて～～することをお勧めします。

上記の文例を使って書いたパフォーマンス作品を以下に挙げる。最初の3行は記入してあるものをプリントとして配付してあるため、引用では省略している。

課題①のパフォーマンス作品⁽²⁾

「からころも」の和歌は、京都にいる妻と離れ、はるばるきた知立を旅して、妻と離れた悲しみをしみじみと思っている和歌である。この和歌の「はるばるきぬる」という箇所がはるばる旅をしているうちに京都にいる妻と遠く離れてしまい、悲しく思っていることがポイントである。妻と離れた悲しみを知ってみたい方は、はるばる知立へ旅をしてみることをお勧めします。

上記のパフォーマンス作品では、京に妻を残してきたことを悲しく思う男の心情に寄り添うのではなく、「妻と離れた悲しみ」を体験することを目的としている点が「新しい意味の生成」(村田2001:194)を行っていると言える。これ以外にも「俳句や短歌が好きな方は、歌枕『八橋』を訪れて友達と一緒に訪れた人たちとかきつばたという題で句を書いて読み比べてみることをお勧めします」と目的を句会に設定している作品もあった。

次に6・7時間目の課題②のパフォーマンス作品を挙げる。文例は4・5時間目の課題①の文例の『からころも』の和歌の箇所を、「歌枕『八橋』にちなんだ和歌(三首の中から)」という内容に合わせて「『…(※三首から選んだ和歌を書く)』の和歌」に変更した。

「もろともに」の和歌はあなたと一緒に三河の国に行かないけれど、あなたのことを思い続けているということを詠んだ和歌です。この和歌に中の「八橋を恋しとのみやおもひわたらむ」という箇所が比喩表現を使っていて、ロマンチックなところと「あなた」に対する思いが強く伝わる場所がポイントです。大切な人と遠距離で会えない方は歌枕「八橋」を訪れて大切な人との思い出をきれいな風景を見ながら思い続けることをお勧めします。

作品をもう一つ挙げる。

「恋せじと」の和歌は苦しいとわかっている恋に諦めがつかず思い悩んでいる様子を読んだ和歌です。

この和歌の中の「恋せじと」という箇所が筆者のもう恋はしないと決めていたほどの苦しい経験があったのにその思いにさからうほどに思いが大きいと感じさせるところがポイントです。

諦めきれない恋に悩んでいる方は歌枕「八橋」を訪れていつもと違った風景や空気をすって心をあたらしくのびのびすることをお勧めします。

上記の「もろともに」を扱ったパフォーマンス作品では、「八橋」を訪れて「きれいな風景」を見て遠距離で会えない人との思い出に浸ることを勧めている。また、「恋せじと」を扱ったパフォーマンス作品では、「八橋」を訪れて「いつもと違った風景や空気をすって心をあたらしくのびのびする」と、リフレッシュすることを勧めている。これらは、「八橋」の地を訪れることで思い出に浸ったり、リフレッシュしたりするという「新しい意味の生成」(村田2001:194)を行い、さらには新しい地域の風土を作り出していると言える。

おわりに

本論文は学習者自身が言語や言語文化を発展させる主体となる授業設計を立てることを目的として、『伊勢物語』(東下り)を起点として、歌枕「八橋」に関連した和歌を用いたPR文を書くようにした。和歌の口語訳及び本文内容をもとにして、PR文の「対象」を誰にするかや観光の「目的」を何にするかを考える過程で学習者が「新しい意味の生成」(村田2001:194)を行っていることが確認された。俳句の創作と鑑賞を一体化させた授業計画を実践した植阪・光嶋(2013)は作句の過程で「改めて気づいたことを句にすることで、それが共感をもって受けと

められていることを子どもたちは経験する。これは、「郷土の再発見」である」（植阪・光嶋2013:409）と述べている。それに対して、本稿で取り上げた歌枕「八橋」を使ってPR文を書く活動は「郷土の新たな意味生成」であると言える。この「郷土の新たな意味生成」こそ学習者が言語や言語文化を「発展させていく担い手」となる手立ての一つだと言える。

今回は課題①、②において学習者が書いたパフォーマンス作品の内容を十分に分析することができなかった。今後の課題として学習者が書いたパフォーマンス作品の内容の分析を行い、「新しい意味の生成」や「郷土の新たな意味生成」の具体的な内容を明らかにしたい。

注

- (1) 口語訳（解釈）は次の書籍のものを使用した。
うちわたし…片桐洋一『後撰和歌集』岩波書店（1990）
恋せじと・もろともに…橋本不美男「俊頼髓脳」『歌論集』小学館（2002）
- (2) 表記などはすべて学習者が書いたまま引用した。

引用文献

- 愛知県史編さん委員会編『愛知県史 通史編1 原始・古代』（2016年）
愛知県史編さん委員会編『愛知県史 通史編2 中世1』（2018年）
愛知県史編さん委員会編『愛知県史 資料編6 古代1』（1999年）
有馬義貴「古典享受・継承に関する学習」『次世代教員養成センター研究紀要』4, pp.53-58（2018年）
植阪有理・光嶋昭（2013）「創作と鑑賞の一体化を取り入れた俳句指導」『教育心理学研究』第61巻4号, pp.398-411
加藤弓枝「名古屋の名所」『人間文化研究所年報』18（2023年）
窪田祐樹「挿絵を活用した『伊勢物語』初段の読解指導」『横浜国大言語研究』34, pp.15-31（2016年）
徳植俊之「教材としての『あずま下り』考」『日本文学』第七一巻第一号, pp.24-34（2022年）
那須充英「図版を活用した『東下り』の読解指導」『古典

- 教育デザイン』1, pp.59-69（2015年）
西一夫「『伊勢物語』教材研究」『人文科教育研究』33号, pp.121-136（2006年）
畠山俊「場面を想像する古文の読解」『お茶の水女子大学附属高等学校研究紀要』65, pp.37-47（2020年）
増淵敏之『物語を旅するひとびと』（彩流社2010年）
村田夏子「文学を味わう」大村彰道監修 秋田喜代美・久野雅樹編集『文章理解の心理学』, pp.190-201（2001年）
文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語科編』（東洋館出版社 2018年）
山岡万里子「読みの楽しさを保障する古文の学習指導」『愛媛国文研究』第六五号（2015年）
渡部泰明『中世和歌の生成』若草書房（1999年）

（愛知県立東浦高等学校教諭）